
野球三国志

是頼

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野球三国志

【Nコード】

N7898K

【作者名】

是頼

【あらすじ】

漢王朝の高祖劉邦が野球という異国の道楽を残してから400年近く経った。だが漢王朝の権威は完全に地に堕ちてしまい、各地の群雄が旗を揚げようになる。

しかし、ほとんどの群雄が野球で事を解決する姿勢を持ったため、命を奪われる心配はない。

そして野球ならではの個性的、そして知略的な表現もある。

そんな乱世を駆け巡る48人の英雄、猛将、智将、軍師、そして女傑の生涯を綴っていく物語である。

高帝が遺したもの（前書き）

このストーリーは基本的に戦を野球に見立てて綴っていきます。

しかし、実際の戦いとは遠くかけ離れた所があり、更には完全にI fなストーリーになってしまうのです。

従ってこのストーリーに対して納得がいかなければ、見る必要はありません。

わかる人にはわかると感じて下さい。

また、このストーリーは三国志好きには多少は理解できたとしても野球好きには理解できないかもしれません。

そして、人物の性格は「真三国無双シリーズ」の性格をそのまま使います。

自分としては三国無双のキャラクターが大好きなので個性的な喋り方だけで今誰が喋っているのか大体わかると思います。（中にはわかりにくい人物もありますが、そこは消去法で考えて下さい）

途中で色々と説明を加えますが、その時は敬語ではありませんのでご了承ください。

自分としてはまず自分で考えたストーリーの評価が知りたいのです。

まず感想を頂きたいです。

高帝が遺したもの

紀元前202年 漢王朝を築いた高帝劉邦は宿敵項羽を打ち取ってから数ヶ月したある時 家臣を呼び寄せこう語った。

「項羽を打ち取るに至るまで、多くの兵が散つて言った。そこで私は異国の道楽と呼ばれる『野球』を広めていきたい」

野球… なんとそのようなもので何がと感じた家臣であつた。そもそも野球とは何か… と首をかしげる家臣に対し、劉邦は詳しく説明し口でいって伝わりにくいものは自ら行動で説明し、家臣の感想を聞いた。

「野球とはすばらしいですな 陛下」と劉邦の3英傑の一人韓信が納得し、その後すぐ彭越が

「某も仲間を集めて野球をしてみたいものです。」

そして、英布も

「投げた球を打つ… 打った球を捕る… 打ったものはひたすら走る。野球とは奥が深い。」

この3人が受け入れてくれれば決まりだと感じた劉邦は己の名声を利用し、剣や槍そして弓といった命を奪い合いの象徴と呼ばれるものを排除した後（但し、獣狩りなどを行うものは、武器を持つてよい）、野球を広めるために、

家臣、民にこの言葉を伝えた。それは

1・剣を持つてはいけない、バットという剣と同じくらいの長さの棒を持つのだ。

2・盾を持つてはいけない、グローブという手袋を持つて守れ。

3・同じ争い事といえども、命の奪い合いをしない、それが野球だ

4・野球は、体を鍛え、己を鍛えるものだ。

といった事を伝えていった。

家臣や民はその言葉を聞き、野球のすばらしさを徐々に理解していった。

こうして、野球という道楽を広めた甲斐あつて争い事は野球で解決しようとする姿勢を持つものが増え始めた。

劉邦は死ぬ間際こう語った。

「私が興した野球がここまで広まるとは思わなかったな。もし再び世が乱れたとしても、野球で事を解決するはずだ。

命の奪い合いをされるよりは万倍もマシといったところか」

こうして、劉邦は満足そうな顔をして、息を引き取った。

野球三国志曹操伝 第1章 奸雄現る

長きに続いた漢王朝も宦官が賄賂で出世し、その賄賂のもとには民衆から巻き上げる卑劣な政治状態である。

高帝が築きあげた戦野球（戦いは野球で解決するもの）は民衆より宦官の方が強く民衆は当然それに従うほか無く、漢王朝は野球を悪用し、やりたい放題であった。

やがて、苦しみ始めた民衆は、栄養失調に陥り、それにより病が起こり始める。

そんな中、張角と呼ばれる謎の中年が現れた。

「さあ、飲むのです。これは病がたちまち治る 魔法の水です。」

病に伏せていた人はなんと顔色が良くなり病が治った。これにより民衆は張角を救いの神様と崇めるようになる。

こうして、張角は時がくるまで漢王朝に自分達の存在を隠しながら、自分を信じる民衆を増やしていった。

一方、黄巾賊が活動を始めた事に早々に気付いた者がいた。それは曹操である。

「ふむ。漢王朝も落ちぶれたものだ。これでは、張角を信じて当然か。」

曹操の発言に対し、従兄弟に当たる夏侯惇が

「孟徳。このままでは、手の打ちようがないぞ」

そして、曹操と夏侯惇の従兄弟の夏侯淵と曹仁は

「惇兄の言つとおり、今のうちに俺達の力を見せなければなりやせんぜ」

「そのためには、義勇軍としてでも討伐軍の仲間に加わるのが宜しいかと」

曹操の返答を待つ家臣達。それに対し曹操は、

「よし いいだろう。だが、今回わたしについてくるのは、夏侯惇と夏侯淵のみだ。その理由は、野球だからだ」

野球は9人で行うもの。討伐軍が自分の将で固まっては、迷惑になるはずだ。

「だが、お前達もいくら試合に出ないからといって訓練は怠るな」といって、全員訓練場に向かう。

曹操は右投げ右打ちの投手。147キロの伸びと切れのある球を投げ、スライダーと軍師の象徴と呼ばれるシンカー（シンカーは智謀が無くては棒球となる）を巧みに操る。

夏侯惇は右投げ左打ちの三塁手であり、バッティングが巧妙で10試合で打率は7割である。守備も堅く、試合を重ねていくたびに進化を遂げていく名選手である。

夏侯淵は右投げ右打ちの一塁手で、夏侯惇とは対照的に力のバッティングで活躍するだけでなく、球筋を見切り絶好球を狙うことが出来る逸材である。

その後曹操はこの2人を連れて討伐軍の仲間に入った。

討伐軍大將は何進、異母妹が霊帝の皇后となり、その皇后が霊帝に寵愛されてその時期で立場上何進が強いものとなっていた。

だが、曹操にしてみれば漢王朝の威光をひたすら示すことしか頭がない無能と感じている。

「この戦い、わしが抑え、あの2人がひたすら打つしかないだろうな」

尚、曹操はまだ気付いていなかった、この後、争うだろうとされる
群雄の存在を…

そして、討伐軍と黄巾党の戦いが始まった。手始めに3つの砦を落
とす事となり、曹操は皇甫嵩軍の中継ぎ投手となった。

「わしの出番があるかないかは夏侯惇と夏侯淵の活躍次第で決まる。
わしはそれでも構わないがな」

2回の表、0対1で黄巾党リードの中1死二三塁の所で6番打者の
夏侯惇が登場する。対する投手は人公將軍の張宝。

人並みより上のスタミナと落差のあるフォークを主体とする。但し、
速球は最高131kmしかないため、フォークに勢いが無いことが
度々ある。

しかも、自身が総大将であるにも関わらず、先発になるという無謀
な判断を冒している。（総大将が投手の場合は基本的に抑え投手で
ある

その理由は、総大将がKOされるとその試合は負けを意味するよう
なものである。）

「愚か者だな。自信過剰な孟徳でも、本来は控えめな抑え投手だぞ」
と夏侯惇は呆れ気味ながら、張宝の得意球を左中間に持っていき、
2人のランナーを帰し、その後次のバッターのヒットで自分も帰っ
ていき、3対1となった。

3回の表、1アウト2塁で3番打者の夏侯淵も兄貴分の夏侯惇に
負けまいとし、

「惇兄は涼やかなこつちな。ま、俺もそうさせてもらうかな、全
然迫力がねえからな」

といって夏侯淵は普段あまり見せない冷静な表情でツーランホー
ムランを打つ。

しかし、3回の裏、先発の王允がスリーランを打たれた後に2失点をしてしまい、5対6となった。そしてようやく曹操の少し早い登板となった。

「フン、わしはこのような雑魚に打たれる気がしないな」

曹操は自分の予想通り、7回までノーヒットピッチング（死球3回）を記録した。

因みにその死球は、死球でも塁に出るだろうと予測し危険球に見えてそうでないピッチングを放ち、バッターに怪我を負わせた非情な行為であった。

死球を喰らった打者は曹操に対し

「貴様！ わざと投げおつたな！許さんぞ」

曹操はそれの返事は

「わざと当たりに言っておきながら何ゆえ訴える必要があるのだ。貴様らは塁に出れたのだぞ。その無謀な勇氣、誇りに持ったらどうなのだ？どうだ審判。このわしは危険球を投げたのか」

審判は首を振った。審判に根回しをしているのかと疑うが結果的に曹操は危険球退場にならなかった。

張宝も曹操に対し危険球を投げ返すが、曹操はその球を尻で受け止めたので無傷であった。

更に張宝は危険球退場となり、張宝軍は士気が無くなり、降伏せざるを得なかった。

敵味方巧みに操り、敵の計略を見切ることから人々は彼の事を後「乱世の奸雄」と呼ぶようになった。

結果8対6で皇甫嵩軍の8回降伏勝ちとなる。今回の戦いは曹操

率いる3人の大活躍であった。（夏侯惇・夏侯淵は共に猛打賞。2人で合計7打点である）

討伐軍は3つの拠点を攻略し、張角率いる黄巾党と戦う。そこで曹操は英傑の存在を知る。劉備と孫堅である。

「わしとは違うが、大きな野望をそれぞれ持っている大器だな。わしはこの2人といずれ戦うはずだな」

と感慨にふけたが、曹操の出番は無かった。理由は曹操、劉備、孫堅の家臣があまりにも優秀すぎたからである。

何進は配下に対し

「みな良く戦ってくれた。これで漢王朝は再び安泰であるな。」

しかし、曹操、劉備、孫堅は安泰にはならない事に気付いていた。

曹操は

「再び漢室に魔の手が襲い掛かるはずだ。わしだけでなく家臣を鍛えていかなければいかな。」

劉備は

「この戦いで漢室が堕ちた事を露呈してしまったな。この私が復興していかなければ」

孫堅は

「長い戦いがここから始まるのだな。宿敵はおそらく曹操殿と劉備殿といったところか」

とそれぞれの感想を述べ、故郷へ戻る3人。そして近い将来、再び漢室のために力を合わせる事となる。

野球三国志曹操伝第2章 暴虐の豚

2・暴虐の豚

黄巾の乱から何年かが経ち、霊帝が病死した。そんな中董卓が上洛し少帝（後の献帝劉協）を擁した。

「がははは！野球で事を解決しようなど生ぬるいわ　これから
は人斬りの時代じゃ」

これを重く見た群雄の中の一人曹操は

「董卓を倒さねば忌々しき本当の乱世が蘇るな」

本当の乱世とは高帝劉邦が帝位に就くまでの時代の事である。とそこに曹操の旧友である袁紹が

「しかし曹操よ。董卓には華雄と呂布の2人の猛将がいるのだぞ。
簡単には倒せまい」

といった弱気な発言に対し曹操は

「わしは黄巾の乱で相当な兵^{つわもの}を見てきたのだ」

袁紹はその話を遠まわしにするかのように

「そういえば曹操　お前が連れてきた親衛隊は大して強そうに見える
ないのだがな」

親衛隊とは典韋と許？のことである。典韋は並外れた力で本塁打を

10本中8本打つ豪傑で曹操は古の戦士「悪来」と呼んで慕っており、
許？はもとは村民であつたところを悪来に出会い共に戦うことを誓つた。

「わしは才能のあるものは、名門であろうが、村民であろうが使つていくものだ。名門ばかりが優秀でないことこの試合で教えてやる」

という発言に対し袁紹は

「まあよい、試合で見させて貰おうではないか」

こうして？水関の戦いが始まつた。試合は関羽の豪打で華雄をKOさせた。しかし注目の悪来と許？はお互いに4打数2安打であつた。打点は悪来が1打点を取つたくらいである。

「曹操。でかいことを叩いた割にはたいした活躍していないではないか」

という皮肉に対し曹操は

「相手が悪かつたのであろうな。相手がたいした事無ければ熱くはならないものだな。」

と言い返す曹操。

「フン。次の虎牢関には呂布がいるのだぞ。そやつだと熱くなるのだな」

という袁紹の発言に

「さあ どうか」

曹操はさらりと返事した。そして虎牢関の戦いが始まった。曹操は悪来と許？に対し

「お前達は袁紹になめられているぞ そろそろ本気をみせてやれ」

それに対し2人は

「わかりやした！ワシの本当の力をあいつに見せてあげやすよ！」
「おいらの力ここで思い知るだよ」

2人が本気を出し呂布が出るまでの間、一回の強振でスタンドに運ぶといった一直線なバッティングを行った。まるでどこまで飛ぶか、競うように・・・

「許？ワシの一発のほうか飛んだだろうが」

「なあに」 おいらのが飛んだだよ」

と軽いノリで楽しみながら打ち合う2人であった。

「どうだ。タイミング間を測らずたった一振りでも本塁打とはなかなかとは思わぬか？そつえばお前のところの文醜は一本も本塁打を打ってないな」

自慢げに話す曹操に対し

「な、何今回の文醜はどちらかというと投手を上手く扱うこと（リ

ード）に調子が良いだけだ。全く珍しいな」

戸惑う袁紹を見て曹操はようやく出鼻をくじいてやったぞと心の中で思った。

その後呂布が登板するが、悪来と許？は凡打に終わり、張飛に活躍を持っていかれた。

「すいやせん殿。呂布からは打てやせんでした。」

それに対し曹操は

「何、今回は仕方が無い。また呂布と戦う機会があるかもしれないのだ。その時まで訓練だ」

「わかりやした！」

「今日の曹操様 いつもより機嫌が良く見えるぞ」

と和気あいあいとしている中事態は変わる。試合中に董卓軍はこの地を置いて逃げ出した。献帝の本拠地洛陽を捨てて・・・

曹操は

「このままではいかん。早く追わねば」

「曹操。このまま行っても無駄足だ。退くときは退くものだ」

「わかった。この1件で董卓が本当の乱世を生み出すのが遠まわしになったということだ」

こうして献帝は取り返せなかったので本当の勝ちとはいえなかったが、虎牢関の戦いは反董卓連合軍の勝利に終わった。

その後、董卓は自分の義理の息子に当たる呂布と董卓の妾の貂蝉に

暗殺される。本当の乱世はこの2人 いや呂布が汚名を被り鎮圧したようなものだった。

野球三国志曹操伝第3章 孤独の猛将呂奉先

董卓を暗殺した呂布は殺人を行ったことで、重罪として幽閉されるはずだった。

しかし、董卓に苦しめられた民や侍女等の女性などからは感謝の言葉もあつてか、都から追放される処分ですんだ。

「よかったですね 奉先様 幽閉されなくて」

「すまないな お前にまで 苦労をかけて」

「いいのです もともとはお義父さまの命令ですので」

貂蟬がいう、義父とは黄巾の乱に従軍していた王允のことである。呂布と協力し「美女連環の計」を企てた張本人である。しかし、その計が成功した後、病にかかり死んでしまったため、貂蟬は行くあてが無く呂布の妻として付き添うことになった。

この後、野球がなければ生きていけない呂布は、袁紹のもとにつくが袁紹自身が呂布を恐れ始め、金目の物を与えて追放させた。ねぐらを変えようとした呂布は徐州に拠点を得た劉備のもとにつくことになった。

劉備軍が袁術討伐で紀靈軍に勝利したその後、呂布が反旗を翻す。窮地に陥った劉備はこのまま、曹操のもとに向かい面会を行った。

「大変だったようだな劉備殿。なあに呂布はわしらにとっても敵だからな。これよりもに戦い、呂布を倒そうではないか」

「心強いすな」

その後、軍議を行いどう呂布に立ち向かうかを考える曹操と劉備たち。

とそこに軍師の郭嘉が

「この時期の下？は天候が崩れがちです。そのため水門の決壊もあるとのことですよ。」

郭嘉の発言に曹操は

「そうか。そしてその時期を待ち、洪水を流し呂布を孤立させるというわけか」

そして、その時期が来るまで、訓練を行う曹操達。とその最中に曹操は劉備に話しかける。

「劉備殿。少し時間をくれないだろうか」

「はい。私でよければ」

といって曹操は家臣から離れて劉備と誘い、池が見える庭園で劉備と対談する。その内容とは

「劉備殿。この乱世の中、英雄と呼ぶにふさわしい者はそなたから見て誰であろうな」

と大胆な質問に対し劉備は

「それは・・・曹操殿です」

意外な答えに驚いた曹操は

「・・・なぜわしなのであろうかな。わしなどまだまだ、国を治める力は」

「いえ、私は、黄巾の乱や虎牢関で様々な群雄を見てきました。しかし、見るからに器の小さい者ばかり。いえ、例えそれなりの器であつたとしても、曹操殿が凄まじい器のため、小さく感じてしまうくらいなのです」

「そうか」

意外なのか、想定どおりなのか、戸惑いが感じられる曹操　そして曹操は

「わしには、劉備殿が英雄に感じられるな」

「この私が・・・いえ私など義勇軍になり、一国を得るまではただのムシ口売りな上、国を奪われ英雄などとはお恥ずかしいものです。」

「いや、劉備殿は今天命に恵まれていないだけだ、ちゃんとした国を得た時、自他ともに認める英雄になるはずだ」

お互い謙遜しながら話を進める2人とそこに郭嘉が現れ

「殿、お話の途中申し訳ないのですが、そろそろ徐州へ向かう好機かと存じます」

「そうか　では行くか　劉備殿」

「はい」

こうして、呂布を倒すために徐州へ向かう連合軍。このことを耳にした張遼が

「呂布殿　劉備が曹操と組んでこちらに向かってきます」

「くだらぬな　群れているだけで　雑魚だ」

「奉先様・・・」

と不安を抱える貂蝉を少し気にしながら迎撃に向かう呂布軍

「来たか劉備！ この俺が貴様の全てを終わらせてやる」

この戦いの先発は、連合軍は李典から、そして呂布軍は総大将の呂布からである。それに対し曹操と劉備は

「奴は9回だろうが、18回だろうが投げ続けるな」

「呂布は近年、スプリット（フィンガーファスト）に磨きをかけているそうです。簡単には打てません」

「しかし、時が来た時全てが変わるのだ」

そして、3回表2 - 4で連合軍が負けている中その時が来た。

「な、なんだ」

「ま、まさか」

「み、水だ！ 洪水が来た！」

もう手遅れであつた。運悪く、守備側であつた呂布軍はことごとく冷たい水に流され、体温が下がり野球が出来る体ではなくなった。しかし・・・

「うおおおお 貴様ら！」

呂布のみは無事であつた。

「さすがに化け物だな」

「だが、奴一人では何も出来まい」

そう、呂布の剛速球を捕る軍師の陳宮までも流されたため、控えは呂布の球を捕るほどの力を持っていなかった。さらには呂布をリ―

ド出来ないため、呂布のコントロールが定まらなかった。
これに対し5番打者の夏侯淵は

「じゃあ ホームスチール なにもしねえで塁に出れるな それに盗塁もし放題だな
ま、さすがに本盗は出来ねえな 速過ぎるからな」

その言葉通り、投げれば暴投を繰り返し、捕手がたまたま捕った時は肩が弱いために、盗塁をされ続け、結果4 - 4に追いついた。
しかし、その状況を見ていらなかった貂蝉がマスクを被る。当然
呂布は

「貂蝉・・・ 何故お前が出るのだ」
「奉先様に勝ってもらいたいのです。それともこのまま一人の女のために負けるつもりですか」

ところが、冷酷非情な呂布にとって貂蝉は特別な存在である。一人の女としてみることは出来ない。しかし、なりふりはかまっていられない。呂布は、貂蝉を試合に出させた、連合軍への怒りを糧に倒すことを決意した。

「許さんぞ！貂蝉まで苦しめることになるとはな」
「奉先様・・・ 貂蝉は嬉しく存じますわ」

曹操はただの女ではないことに気がついた。呂布を巧みに操れる（リード出来る）と感じた。
そして、その予感は的中した。
なんと、激怒している呂布の球を受け止めたのだ。当然この球はストライクである。

「く・・・やはり」

そして3回表は3者残塁で三者連続三振で3アウトチェンジその裏
呂布がソロホームランを打ち、4-5になった。

その後呂布は8回になったところで、いまだに連続三振の記録を増
やしていき、今では17者連続三振になった。

しかも6回裏、貂蝉がランナーで出ている中で、ホームランを打っ
たので、4-7と差がつく。そこで、曹操は

「全軍、バントだ。とにかく球を前に打て」

この言葉を聞き事態は一変した。本当は勢いで言っただけであつた
が、意外にも、作戦が上手くいき。控えの兵の守備はボロボロだっ
た。

更には、ボールをひたすら捕っていた貂蝉が無茶をしたことが災い
し、ボールを追う体力も無くなっていた。
その事態を重く見た呂布は貂蝉に向かい、

「貂蝉！もういい。俺はお前が苦しむのは見たくない」

呂布は涙を流し、やがて号泣した。これを見た劉備は

「あの呂布にも、人の心があるのだな。もしこれが本当の戦であれ
ば、人の心を感じる余裕は無かつただろう。」

と野球で事を解決する時代だからこそ、呂布の慈悲を感じ、もらい
泣きをしていた劉備であつた。とその時呂布が連合軍のベンチへ向
かい

「降参だ。貂蝉のために、負けを認めてやる」

呂布はひたすら泣きながら、降参した。本当の乱世なら今までの悪事に対し処刑されているはずだが、曹操のはからいで許昌で貂蝉とともに

に村民として暮らすことを勧めた。これに対し貂蝉は

「奉先様は野球が無くては」

「良いのだ もともと野球は道楽なんだ。仲間を集めればすぐ出来る。」

「奉先様・・・ ううつ」

「泣くな。貂蝉、これから穏やかに暮らすというのに」

さすが野球、野球を広めた高帝劉邦にはつくづく感服させられる曹操と劉備であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7898k/>

野球三国志

2010年10月9日07時54分発行